

「大学の顔」としての博物館

～博物館と関わってきた 40 余年の経験から思うこと～

片山 隆裕

1. 博物館と出会うーアメリカ留学時代の貴重な経験

私が本格的に博物館に興味を抱くようになったのは、アメリカ留学時代の 1980 年代前半であったと記憶している。当時、ニューヨーク州立大学大学院（オールバニー校）に留学していた私は、アメリカ自然史博物館（ニューヨーク）、ボストン美術館（マサチューセッツ）、スミソニアン博物館（ワシントン DC）をはじめとする有名な博物館・美術館を訪れる機会を得た。また、長期休暇を利用して、アメリカ各地や近隣諸国を旅することで、カナダ国立博物館（オタワ）、メキシコ国立人類学博物館（メキシコシティ）、ビショップ博物館（ホノルル）、グリフィス天文台（ロサンゼルス）など、私の専門である人類学関連の博物館や自然科学系の博物館を含め、多くの博物館・美術館を訪れる機会を得ることができた。そして、その規模や展示資料・収蔵資料の豊かさは、日本の博物館を通じて私がそれまで知っていた博物館のイメージを大きく変えることになった。

2. 九州国立博物館の誘致に関わるー『Museum Kyushu』の編集委員として

本学に赴任した 1992 年以降、さらに本格的に博物館と関わりをもつことになる。特に、福岡県太宰府市に国立博物館を誘致する目的で、1980 年に発足していた博物館等建設推進九州会議（以下、九州会議）と関わりをもち、その機関誌『Museum Kyushu』の編集委員の一人となったことは大きい。戦後の復興を遂げた日本では、1970 年代に入ると博物館ブームが起きていた。2 度のオイルショックによって高度経済成長が幕を閉じた当時の日本は安定成長の時代に入っており、人々は経済成長から文化も含めた豊かな生活を求めるようになっていた。その結果、国内の博物館数は、1968 年度の 338 か所から、1980 年度には 409 か所に増えることになった。

この時期、国立博物館の誘致に関しても全国の自治体が手を挙げ、「国立産業技術史博物館」構想を掲げる大阪など、ライバルは多かったという。九州会議が差別化の一手として創刊したのが『Museum Kyushu』で、1981 年 1 月の第 1 号から年 4 回の

ペースで発行された。この機関誌を発足させ、その後も九州国立博物館誘致へ先頭に立って尽力されたのが本学の大学博物館初代館長でもあり、国際文化学部名誉教授の高倉洋彰先生だった。

『Museum Kyushu』の編集会議は、毎月第1火曜日の夜、福岡市中央区の西日本新聞会館11階の会議室で開催された。毎回、10人前後の編集委員が集まり、特集テーマや誰に原稿を依頼するかなどについて活発な議論が交わされた。私がこの場に加わったのは本学への赴任から2年後の1994年からだった。考古学、歴史学、地理学、民俗学、文化人類学、地質学、昆虫学など多様な分野を専門とする大学教員、博物館学芸員、新聞社の方々などによって刺激的な議論が交わされ、「薬のきた道」「気候の歴史」「漆の文化」「アジアの民衆芸能」「アジアの文書館」など、次々と多彩なテーマの特集が組まれていった。

編集委員の仕事はボランティアだったが、毎年1度、国内外の博物館・美術館で研修をさせていただく機会に恵まれた。そのおかげで、大英博物館（ロンドン）、ルーブル美術館（パリ）、ウフィツィ美術館（フィレンツェ）、国立故宮博物院（台北）などのほか、国内外の多くの博物館・美術館を訪れ、第一級の資料を直に鑑賞したり、収蔵庫を見学させていただくなどの貴重な機会に恵まれた。そうした時期を経て、2005年の九州国立博物館の開館を迎え、『Museum Kyushu』も2006年の第81号をもってその役割を終えることになるが、社会の中で博物館の果たす役割の大きさを実感する日々だった。

3. 博物館への理解がさらに深まる—博物館学芸員課程主任として

本学では故山中耕作教授ほかのご尽力によって1985年に学芸員を志す全学部 of 学生を対象とした博物館学芸員課程が設置され、希望する学生たちが学芸員資格取得に必要な単位を修得できるようになった。博物館学芸員課程の運営機関としては学芸員課程の科目を担当する教員が構成メンバーとなっている「博物館学芸員課程協議会」が設置され、そのまとめ役として原則国際文化学部（文学部時代は国際文化学科）の教員が1期2年の任期で博物館学芸員課程主任を務めることになっている。

本学赴任当初から博物館学芸員課程科目の担当者の1人であった私は、3期6年間、学芸員課程主任を務めることになった。博物館学芸員課程主任の業務は学芸員課程全般の調整業務を担うことにあるが、特に「博物館実習（その1）」（3年次）で学内実習に来てくださる外部講師の先生方とのパイプ役になったり、「博物館実習（その2）」（4年次）の学外館務実習で本学学生の実習を引き受けてくださる博物館・美術館との交渉を行ったりすることである。私が学芸員課程主任を務めていたときは、課程履

修者も年間 50～70 人前後と多く、多い時には毎年 30 館以上の博物館・美術館と実習生受け入れの交渉を行っていた。なかなか大変な仕事ではあったが、この仕事を通して福岡県内外の多くの博物館・美術館との関わりを深めることができ、そこで働く多くの学芸員諸氏と知己を得ることができた。このことは、私自身の博物館への理解をさらに深めることにつながり、現在でもかけがえのない財産となっている。

博物館学芸員課程主任としての経験を通して、学芸員を目指す多くの学生たちとも交流を深めることができた。博物館学芸員は、法律の定めるところに従って博物館・美術館に置かれる専門職員で、人文・自然の諸科学の研究者であると同時に、その博物館・美術館等を教育の場として、来館者に対し解説・指導を行う生涯学習教育者である。実際に学芸員の仕事に就くのは狭き門ではあるが、博物館学芸員課程で学んだ知識や経験は、たとえ学芸員にならなくとも、博物館に関する教養を身につけ、文化財等を大切にすることを養うという意味でも、学生たちにとって貴重なものとなったことは容易に想像できる。

4. 博物館の教育的役割を認識する

—国際文化学部「戦争をフィールドワークする」の研修引率経験から

私が所属する国際文化学部では、2017 年度から「戦争をフィールドワークする」という研修プログラムを実施している。この研修プログラムは、一般市民の方々向けに企画・開講された公開講座「戦争を歩く」（2014 年）、「戦争を記憶する」（2015 年）（いずれも中島和男国際文化学部名誉教授がコーディネーター）を引き継ぎ、私が国際文化学部長を務めていたときに学生向けの研修プログラムとして発足させたものである。コロナ禍の 2020 年、2021 年には中止を余儀なくされたが、それ以外は毎年実施してきており、学生たちが国内・国外の戦争博物館や戦争遺跡を訪ねることによって、戦争の悲惨さを実感し、平和の大切さ・尊さを再認識することを目的としている。

参加を希望する学生たちは、指導・引率教員の下、事前学習を重ね、現地での研修を経験し、帰国後の事後学習を行ってきた。これまで研修を実施した国および地域は、中国（長春、北京、南京）、タイ（カンチャナブリ、バンコク）、シンガポール、アメリカ（ハワイ州）、ポーランド（アウシュヴィッツ）、沖縄、広島、福岡県内などであり、今年度は新たに台湾への研修（2025 年 3 月）も計画されている。

「戦争をフィールドワークする」において重要な位置を占めるのが、各地の「戦争博物館」における研修である。私はこれまでタイ（2017 年、2019 年、2023 年、2024 年）とシンガポール（2018 年）に計 5 度引率を経験してきた。タイではアジア太平洋戦争中に日本軍がタイのノンプラドゥックからビルマのタンビュザヤ間の 415km に敷設

した「泰緬鉄道」に関する戦争博物館（JEATH 戦争博物館、タイ・ビルマ戦争博物館、ヘルファイヤー・パス戦争博物館など）、また、シンガポールではマレー作戦とシンガポール戦争をテーマとして、シンガポール国立博物館、シンガポール戦争関連博物館（バトルボックス、旧フォード工場戦争記念館、シロソ砦戦争記念館など）を学生たちとともに訪ねた。

「戦争をフィールドワークする」はいわゆる「戦争ツーリズム」「ダーク・ツーリズム」というカテゴリーに入るが、こうしたツーリズムは、決して「楽しい観光」にはならない。戦争博物館や戦争遺跡を訪ねて学んでいくにつれて、見学者である学生たちの口数が少なくなり、彼らの気持ちが沈んでいくのがわかる。この「負の感覚」を体験することは実は非常に大切なものである。毎年、研修後に研修参加学生たちから提出されるレポートを読んでみても、「恐怖」「戦慄」「残酷」などのキーワードが繰り返し出てくるし、学生たちが「加害者としての日本人」を強く意識させられていることがわかり、戦争博物館の展示見学を通しての学びが、とても重要であることを実感する。

こうした研修の引率経験の中で学生たちと「戦争」について議論を重ねる度に、博物館の教育的役割とその重要性を強く認識させられる。そして、博物館の教育的役割の重要性は本学の大学博物館にも当てはまるものである。本学がキリスト教主義を掲げる大学であることを踏まえると、キリスト教関連資料の展示をする大学博物館の教育的価値はもっと認められてしかるべきものであるように思う（本学の大学博物館については後述）。

5. 大学博物館長に就任する一思いがけない依頼

私は2022年9月に満65歳を迎えていたので、本学の役職者に就任することはないと思っていた。しかしながら、2022年11月に思いがけず博物館長就任の要請を受けることになった。最初は他に適任の方がおられると思い固辞したのだが、諸般の事情から館長就任をお受けすることになり、2023年4月から館長として現在に至っている。大学博物館にはたまに訪れて常設展や企画展・特別展など見学してはいたが、内側から大学博物館を見ることになって、いろいろと学ぶことや驚かされることが多いことがわかった。そうした「学び」や「驚き」も交えながら、本学の博物館の歴史、役割、収蔵資料、活動などについて述べてみたい。

(1) ドージャー記念館の価値

西南学院が開学したのは1916年である。創立者はC. K. ドージャー先生（1879～

1933年)というアメリカ南部バプテスト派の宣教師であった。ドージャー先生はアメリカ・ジョージア州ラ・グランジュに生まれ、マーサー大学を卒業した後、南部バプテスト神学校に入学した。その後、1906年来日し、1916年4月、104人の学生と9人の教職員が出席した開校式で現在の西南学院が創設されることになった。西南学院は当初、現在の福岡市大名に設立されたが、1918年に西新に移転することになり、その際、西南学院の本館として現在の大学博物館(ドージャー記念館)が建設されることとなった。

西南学院の本館が着工したのは1920年のことであり、建物の左側の壁面には「1920」の定礎を見ることができる。本館を設計したのは、英語教師として来日していたウィリアム・メレル・ヴォーリズ(1880～1964年)である。アメリカ・カンザス州レブンワース生まれのヴォーリズは学業として建築を習得していたわけではなかったようだが、1905年来日し、その3年後に建築設計事務所を開設し、YMCA会館や教会、学校、病院など、キリスト教に関する多くの建物を手掛けた。

大学博物館の屋根は、宮城県北東部に位置する雄勝町(現石巻市雄勝町)で採れる天然の玄昌石から作られたスレートを使用している。スレートとは、屋根葺き材として使われる石質の薄い板のことを言う。本館の屋根は石を5mmの厚さに成形しており、軒が屋根の部分からほとんど突出していないのも特徴となっている。2、3階の床には隙間にコークスを挟んでいる。コークスとは石炭を蒸し焼きにしたもので、防音の効果をもたらすために使用されている。

ヴォーリズが当館を設計する際に作成した設計図と建築の際の仕様書が残されているので、建設に際してどのような材料が使われ、どのように作られたかがわかる。しかし、1921年に完成した当館の古写真を見ると、必ずしも設計図通りに建設されたわけではないようである。例えば、設計図では建物の正面に三角破風が描かれているが、実際には三角破風は作られなかった。2004～2005年に本館の改修工事が行われた際には、これらの設計図や古写真など残された資料をもとに、出来るだけ建設当時の状態に戻すように試みられたそうである。

大学博物館の建物は、もともと1階は西南学院中学校・高等学校の職員室や事務室、2階は講堂として使用されていた。西南学院中学校・高等学校が百道浜地区へ移転した後、この建物は2004年に「福岡市指定有形文化財」に指定されたが、老朽化が進み、耐震性に問題があったため、改修工事がなされ、2006年に西南学院大学博物館として開館した。その後、2015年には「福岡県の有形文化財」に指定されて現在に至っている。大学博物館は赤煉瓦造りの3階建だが、関東大震災後(1923年)は煉瓦の建物が作られなくなるので、こうした煉瓦建築は福岡では数少なく貴重なものとなっている。

(2) 大学博物館の役割

西南学院大学博物館はキリスト教主義の学院教育活動方針に基づき、キリスト教文化に焦点をあてた特色ある博物館として高い評価を得ている。赤煉瓦の博物館建物は、歴史の重みと荘厳さから学院のシンボルとして位置づけられている。



リニューアル後の大学博物館

西南学院大学博物館には、館長のほか、専門的知識を持つ学芸員、学芸員を補佐する学芸研究員、学芸研究員を補佐する学芸調査員、事務室職員などのスタッフがおり、本学の学生、大学院生の実践的な学習を行う場としての役割も担っている。特に、博物館学芸員の指導の下、博物館学芸員課程を履修する学生たちを対象とした「博物館実習（その2）」が毎年行われており、豊富な展示資料や収蔵資料は教育効果を高めるのに大きな役割を發揮している。学芸員、学芸研究員などを中心に、必要に応じて学芸調査員が補佐しながら、年に数回の企画展、特別展、公開講演会・シンポジウムなどを開催し、福岡県内外から多くの観覧者を集めており、地域社会にも多大な貢献をしている。

私が館長に就任した2023年4月以降は「戦争と学院一戦時下を生き抜いた福岡のキリスト教主義学校」、「シーボルトと近世の蘭学者たち」、「描かれた朝鮮通信使」、「創られたキリシタンイメージ—排耶書・実録・虚構系資料」などの展示が行われた。2024年9月21日（土）には、最後に記した企画展の関連公開シンポジウム「明治以降のキリシタンイメージ—形成過程とその所産」（担当・鬼束芽依学芸研究員）が開催されたが、福岡県内外から多くの研究者や専門家たちの参加もあり、高いレベルで

の議論が交わされた。さらに2024年度は、10月21日からの特別展「知のアトラス—宇宙をめぐる教会と科学の歴史」(担当:森結学芸員)の開催準備が進められている。

こうした規模の大きな展覧会のほかに、博物館学芸員課程を履修した(または履修している)大学院博士前期課程および学部の学生から成る学芸調査員が主体となってテーマ展示という小規模の展覧会も行っている。これには、学芸員資格を持つ(学んでいる)大学院生や学部学生たちに直に博物館の仕事に携わってもらい、経験を積んでもらうという教育的効果があり、学芸員を養成するという重要な役割も果たしている。また、提携関係をもつ南島原市への「お出かけワークショップ」を含めて年に数回のワークショップを開催している。地域の方々や子供たちにこうしたワークショップに参加してもらうことを通じて、大学博物館は地域社会と密接なつながりを持つことができ、社会に開かれた「大学の窓口」として貢献することが可能となっている。学芸員以下、若手スタッフの頑張りによって、博物館ニュース、博物館研究紀要、博物館研究叢書、博物館パンフレットなど多彩な刊行物も発行しており、本学の博物館を社会に広く理解してもらうための努力を続けている。

(3) 大学博物館の収蔵資料

大学博物館は、キリスト教文化、日本キリスト教史、関谷定夫コレクション、山中耕作コレクション、地域文化、西南学院の歴史などに関する約2,000点の収蔵資料を所有している。

- ・ユダヤ教関係—ジュダイカはユダヤ教の祭具等の総称であり、優れた美術工芸品をさす言葉でもあるが、祝祭や儀礼に関する祭具や生活用具などの数は400点にもものぼる。エトログは、ユダヤ人の三大祝祭(過越祭、七週祭、仮庵祭)のひとつ、仮庵祭で使用される4つの植物のなかのひとつである。仮庵祭は、ヘブライ語で「仮庵」という意味をもつ「スコット(Sukkot)」とも呼ばれる。ユダヤ人の祖先たちがエジプトを脱出して約束の地に着くまでの40年もの間、天幕生活をし、お祭り際には仮庵を造って住んでいたことにちなんだ祝祭で、祭の間、シナゴークでは人々が祈りを唱えながら、立派な木の実(エトログ)、なつめやしの葉、茂った木の枝(ミルトス)、川柳の枝を束にして持ち、朗読台の周りを巡る。祭の期間中は、エトログが乾燥したり傷ついたりしないように、エトログボックスの中に入れて保存するという。

- ・イコン—キリスト教の文化に関するものとして、さまざまな言語で書かれた聖書やイコン、世界の信仰に関する資料を所蔵している。イコンとはギリシャ語で「像」「姿」を意味する礼拝用画像で、「見えるものを通じて、見えないものへと人々を導く」という意図によって制作される。本館がもつイコンは、フィリピンやエチオピアなどの

非西欧圏で製作されたアイコンだが、フィリピンは、アジア唯一のキリスト教国（カトリックが中心）と言われ、1521年にスペイン国王に派遣され、史上初めて世界一周を遂げたマゼランがローマ・カトリックのミサを行ったことが起源と言われるそうである。その後、初代フィリピン総督となったロベス・デ・レガスらがフィリピン諸島のセブ島に到着した1565年以降に本格的な布教が行われるようになった。

・日本におけるキリスト教—1549年、フランシスコ・ザビエルによって日本にもキリスト教が伝来した。キリスト教やヨーロッパからもたらされた新しい情報や文化が日本に与えた影響は大きかった。織田信長がキリスト教の布教を許可したことはよく知られているが、その後政権をとった豊臣秀吉は、1587年7月、筑前の箱崎で伴天連追放令を出した。この時はポルトガル船の来航、つまり貿易は禁止していないが、その後の日本はキリスト教の禁止へと動いていく。徳川時代になってキリスト教禁止が緩和された時期もあったが、徐々に禁止の度合いを強めていくことになる。1637年に勃発した島原・天草一揆はキリスト教の禁止への最後の一打となり、完全にポルトガル船の来航が禁止された。キリスト教を禁止し、キリシタンと呼ばれたキリスト教の信者たちを改宗させるために様々な政策が行われた。大学博物館では、江戸時代に実施された様々な禁教政策に関する史料、キリスト教の日本伝来から幕末・明治以降に再びキリスト教の宣教師たちが来日し、再布教を行うまでを展示している。

本学の博物館は、國學院大學博物館、南島原市と相互の連携を行っており、両機関との相互展示も行っている。こうした学外機関との業務連携は、本学博物館にとっても、また、本学博物館のスタッフにとっても様々な知的刺激を受ける貴重な機会となっており、彼らが人脈を広げ、研究の幅を広げるよい機会となっている。

（4）「博物館実習（その2）」の実習生受け入れ

2006年の開館以来、大学博物館では博物館学芸員課程の「博物館実習（その2）」を受講する実習生を受け入れてきた。2024年度も9月に6人の実習生を受け入れ、森結学芸員などの精力的な指導の下、学生たちにとって有意義な実習が行われた。学外の博物館・美術館における実習生の受け入れ人数が減少傾向にある中、大学博物館が毎年5～10人の実習生を受け入れて実習を行っている状況は、本学の博物館学芸員課程に対する大きな貢献となっている。また、このことは実習生の受け入れ交渉をする博物館学芸員課程主任の立場から見ても、非常にありがたいことととらえることができる。

2023年4月以降、館長として内部から学芸員、学芸研究員、学芸調査員等の仕事ぶりを見てきたが、博物館の業務内容やその役割の重要性を熟知して、それを社会に



実習風景 1



実習風景 2

還元できるスタッフが着々と養成されているのを感じる。これは2006年の開館以来18年間に亘って脈々と受け継がれてきた本学博物館の果たす重要な教育的役割でもあり、その積み重ねは本学にとっても貴重な財産とすることができるだろう。本学の博物館学芸員課程や博物館スタッフ出身者たちは、岡本太郎美術館(神奈川県川崎市)、大野城心のふるさと館(福岡県大野城市)、筑紫野市歴史博物館(福岡県筑紫野市)、大浦天主堂博物館(長崎市)、対馬博物館(長崎県対馬市)、天草市立天草キリシタン館(熊本県天草市)など県内外の多くの博物館・美術館で活躍している。このように、本学の博物館学芸員課程や博物館を通じた人的ネットワークが全国規模でできていることも大学にとって意義深いものだと考える。大学博物館を通して育った研究者や学芸員たちの仕事ぶりを評価し、大学博物館の職場環境をよりよいものにしていくことは博物館の責任者である館長の大切な使命であるが、こうした点を大学や学院にも十分理解していただき、博物館の存在意義を尊重した対応をとっていただけるとありがたいと思う。

6. 大学博物館の現状と未来を心配する一二転三転する博物館移転問題

現在、大学博物館を取り巻く状況は流動化し、不安定化している。大学博物館は1921年竣工という古い建築物であり、耐震性という観点から問題が指摘されてきた。私が館長に就任して以降も2023年度に入り、大学側から博物館の一時移転に関して検討をするよう指示があり、当時の下園知弥学芸員を中心に移転候補先として、東キャンパスの法科大学院棟、西南コミュニティーセンター、百年館を対象に、移転する場合のメリット・デメリットについて詳細な分析・検討を行い、法科大学院棟への移転を希望する報告書を大学に提出した(「大学博物館の移転候補施設に関する管理・運営上の課題等について」2023年7月18日)。この時点では大学としても、また博物館としても、あくまでも「一時移転」という認識であり、耐震工事が終了した後に、

現在のドージャー記念館に戻る心づもりであったが、その後、諸事情により大学側から「移転は恒久的なものと考えてもらいたい」という話があった。

これを踏まえて、博物館としても、耐震性という観点から、館務を真摯にそして精力に行っている博物館スタッフや来館される方々の安全を第一に考えると「恒久的な移転」も致し方ないと考えるに至り、移転先として法科大学院棟を希望し、執行部会議や総合計画委員会に陪席して説明を行った。その後、「法科大学院の利活用に関しては博物館の移転を優先する必要がある」（「法科大学院棟の利活用の検討に関する方向性について（案）」（部長会議資料）2024年4月16日）ということになり、移転については新たに設置される「大学博物館将来運用検討委員会」で2024年6月から議論が開始されることになった。

しかしその後、西南会館の建て替えに伴う状況の変化によって、「法科大学院棟については、新西南会館とあわせて学生会館としての活用を検討するため、優先的に大学博物館の移転先とすることはできない。従って、すでに移転することが決定している事務室及び館長室は、西南コミュニティーセンターへの移転を念頭に検討すること」という常任理事会の決定事項が今井尚生学長に対してなされた（「新西南会館建築の再検討における確認事項について」2024年8月2日）。こうした決定がなされる度に、博物館としてはどうしたら一番よい方向に進むかについて検討を重ねてきたが、常任理事会による今回の指示には現場の考えが活かされていると言えず、正直なところ残念でならない。博物館としては「大学博物館として現在行っている業務内容を質量とも落とさずに行える場としては法科大学院棟が適切であることは一貫して主張してきたが、現状ではそれ以外の選択肢についての検討を迫られている。

大学博物館としての要望がかなえられないとなると、次善の策を考えなければならないが、現時点では移転計画が明確には決定していないため、館長である私だけでなく博物館の現場で働く若手スタッフの間にも大きな不安が生じている。博物館業務は（特に展示業務については）、通常であれば1年前から準備をしてきている実情を踏まえると、今後、移転問題がどうなるかわからない現状には大きな懸念を覚えてしまう。私自身、本学に奉職して33年目になるので、大学が抱える様々な問題については十分理解しており、博物館についてもそうした状況の中で考えていかなければならないことも承知しているつもりではある。今後は「大学博物館将来運用検討委員会」の場で協議がなされることになるが、大学博物館は教育・研究を責務とする大学の「顔」でもあるので、大学には大学博物館の教育的役割やその土台となる資料収集・調査研究や展示機能を担う役割が損なわれないようなかたちでの処遇をしていただけるよう切に願っている。（2024年10月10日脱稿）

【参考資料】

- ・片山隆裕 「戦争博物館をフィールドワークするータイ国カンチャナブリ県の「泰緬鉄道」関連博物館を中心に」『西南学院大学博物館研究紀要』（第12号）西南学院大学博物館 2024年3月
- ・小林茂 「九州国立博物館誘致運動に関する資料ー運動の経過と解題」『大宰府市公文書館紀要一年報太宰府学』第15号 2021年
- ・産経新聞記事 「九州国立博物館（2）ー25年間発信続けた機関誌」（2019年1月17日）（<https://www.sankei.com/article/20190117-KRECSTEXMBM7XEIV4EJCNIPH5A/>）
- ・西南学院大学博物館ホームページ（<http://www.seinan-gu.ac.jp/museum/>）
- ・高倉洋彰 「西南学院大学博物館設置の意義」『西南学院史紀要』2巻 2007年
- ・博物館等建設推進九州会議（編）『Museum Kyushu: 文明のクロスロード』（第1号～第81号）1981～2006年